平成25年度麗澤会体育局 リーダー研修会

講演者：福田　勝幸 理事長
テーマ：「近代オリンピックと日本」（要約）

昨年の研修からこの一年いろいろなことがあった。2020 年に東京オリンピック開催が決まり、拓大では昨年末ボクシング部が全日本王座戦で優勝。今年の正月に陸上競技部が箱根駅伝で９位のシード権を得た。また、なんと言っても野球部が東都リーグで一部になり、秋のリーグで 3 位になったことには感激した。部員の皆さんの頑張りと監督の指導の賜物でこの一年拓大のスポーツ・運動部は充実していた。引き続きの活躍と、勉強にも力を入れてほしい。

近代オリンピックを提唱し主催した人は、フランスのクーベルタン男爵であるが、彼は敗戦で沈んでいる母国フランスで、立派な青年を育てたいと考えていた。イギリス留学で現地の青年が明るく活発で礼儀正しくスポーツに励む姿に感動し、当時、戦争で混乱している世界の国々にスポーツを通して友好・交流を深め、お互いを尊敬し合う平和な国を作れないかと考え活動を始め、１８９４年に国際オリンピック委員会（ＩＯＣ）を設立するに至った。

日本で最初にオリンピック委員会の委員になった人は、日本体育の父、柔道の創設者・嘉納治五郎先生である。彼は明治 44 年に大日本体育協会を作るが、明治 36 年 9 月には本学の前身である台湾協会学校の卒業式に参列している。日本体育協会は現存し、趣意書は皆さんのスポーツをやる全ての人に今でも通じる精神を説いている。この体育組織こそ我が国の体育・スポーツの振興のためのものであり、オリンピック競技参加を念頭としたものであった。友情と連携、フェアプレーの精神を通しての世界平和実現の努力、すべて近代オリンピックと日本体育協会の目的は一緒である。

拓殖大学は 1900 年、明治 33 年に開校したが、1920 年、つまり 20 周年記念の時校歌ができた。「人種の色と地の境、我が立つ前に差別無し」という 3 番の歌詞はまさに近代オリンピックの理念と相通じていることをご理解願いたい。オリンピックにちなんで言うと、東京での開催は 1964 年にあり、戦後の平和国家としての日本の復興を世界にみせた大会となったが、実はその前 1940 年に本学学長・東京市長も務めた永田秀次郎と日本人初の国際オリンピック委員である嘉納治五郎の２人の尽力で東京でのオリンピック開催が決定していた。残念ながら日中戦争が激しくなり中止となってしまった。その後、２人の志を継ぎ日本が再びオリンピックの東京誘致に成功し、１９６４年に東京オリンピックが開催されるという歴史がある。

ここにある体育部員憲章についても一言述べたい。これは 1986 年に本学体育部で起きた不祥事がもとで制定されたものである。このことは当該の部にとどまらず体育会全体、拓殖大学を含め全ての卒業生がつらい思いをしたことがあった。それ故に皆さんはリーダーとしてこの憲章を肝に銘じて後輩の指導に当たってほしい。

人間の尊厳を理解するとき、父母や祖父母、そのずっと昔からのどの代が欠けても自分の存在は無いことを知るべきである。駅伝のたすきが繋がることの有り難さ、先輩・後輩の人格尊重、部を超えた民主的な人間関係を構築することを考えてほしい。

クーベルタンがいた頃、フランスは非常に服従的・封建的な体質で、後輩が上にものも言えない状況であった。そこでイギリスのスポーツを見ると、非常に自由闊達、礼儀正しいジェントルマンであった。去年の柔道界の体罰問題でも論議された暴力行為、強制行為が新聞を賑わせたが、拓大生は、フェアプレーで健全な日常生活をやって頂きたい。そして、拓殖大学の歴史を学び、独立自尊、世界に通じる人間になってほしい。

最後に、努力する人間は希望を語る。怠ける人間は不満を語る。希望を持って生きてほしい。また、私の周囲でも成功する人間は後悔をしない。学生時代はよかったと困難があっても努力してきている。皆さんもリーダーとしてそんなことを頭に入れてがんばってほしい。

※詳しい内容は、創立百年史編纂室シリーズ NO.57『平成２５年度麗澤会体育局連合会リーダー研修会《福田勝幸理事長講演》「近代オリンピックと日本」』をご参照ください。

講演者： 野球部　内田　俊雄 監督
テーマ：「チームリーダーになるためには」

戦後の日本は、敗戦からの復興、東京オリンピック開催と右肩上がりの高度経済成長を迎え、皆が勤勉に一生懸命に働き「貧乏だが、みんな幸せな国だ」と外国人から評価される時代であった。それは古来より人間関係を大切にお互い助け合い、信頼関係を築いてきたからである。このことが結果として経済も発展し、治安が良い国として育ってきた。世界第二位の経済大国、世界第一位の長寿国となり、お金・モノが充分に揃う大変豊かな国になっていった。しかし一方で失うものも多くあった。〝積木くずし〟の家庭崩壊、〝スクールウォーズ〟の学級崩壊、〝孤独死〟の地域崩壊、豊かではあるが幸せさが少ない社会となっている。これら格差社会と言われる現在、社会は何を求めているのか。温室で育つだけでなく、風雪にさらされ、歯を食いしばって乗り越えていくことが必要。能力が無くても一生懸命、ひたむきに頑張る人が社会に出て成功していく。

現在の日本は、経済発展を追いかけすぎる余り、年間約三万人もの自殺者がいる、厳し

い社会である。この社会へ出ていくために大学四年間をどう過ごすか。それは、日本社会の常識が大学・部活動の常識でなければならない。

キャプテンに必要なことは、後ろ姿でチームを引っ張る。今の時代、この方法しかない。誰にも負けない努力をし、チーム誰もが認める選手でなければならない。素材が〝１０〟ある選手が〝１０〟の努力、力を発揮するのが一流選手であるが、〝５〟しか無い選手が〝１０〟の選手と同じようにやっても失敗するばかり。〝５〟しか無い選手は〝５〟になる努力を精一杯すること、それはチームにとって大変な戦力となる。一番大事なのは、いま自分が何をしなければいけないか、またチームメイトが「自分はこれをするから、お前はこれをしっかりやってくれ」という信頼関係がないといけない。大事な場面では、上手く間をすり抜け成功ばかりしてきた選手より、今まで失敗ばかりしてきたが、失敗したことを糧にひたむきに頑張ってきた選手のほうが頼りになる。そういった選手が活躍できるチームになって欲しい。

前任校での監督時代、全日本選手権決勝戦での出来事。ある選手が試合中ケガをして痛そうにしていると、選手同士が取っ組み合いの喧嘩をしている。「大事な試合中なのに痛そうにするな。我慢してでもチームの為に頑張れ」「一生懸命やってのケガだから仕方ないだろ」こう言ったことがベンチ裏で起こっていた。それは何としても優勝したい、勝ちたいとチーム第一に考え取り組んできたことが結果として表れた。良い選手を集めて勝つのは簡単だが、そんなことはほとんどない。チームが苦しいときに皆で支えあい、チーム一丸となって取り組むことで互いに信頼関係が生まれ、それが思いもよらない力を発揮する、また互いに人間としても成長していく。これこそ団体競技の一番の魅力である。

読売巨人軍、ニューヨークヤンキースで活躍した松井秀喜選手は、〝チームの勝利第一〟に現役生活を送ってきた。普通の選手は自分の結果を大事にやっているが松井選手はそうでなかった。その一つの例として、ヤンキース時代に手首のケガをした際、「チームに迷惑をかけ本当に申し訳ない」と語っている。こういった心がけが日米の名門チームで主力選手として、監督・チームメイトから信頼される選手として活躍出来た。今のプロ野球界でこのような選手は、他にいないのではないか。

大学四年間は、社会に出る一歩手前の準備期間である。「一生懸命やって勝つ」これが一番良い、「一生懸命やって負ける」これも良い。しかし「そこそこの練習、努力で勝とう」と思うことが一番悪い。このことだけは必ず守って頑張ってほしい。